

家ではありません。直接にグループ活動を担当することはありませんので、日本語コース全体の様子を外側から見る事ができるのです。ですから、コースの中で日本語学習支援コーディネーターが気づいたことを協会の職員や参加者の皆さんと一緒に話し合いながら、自分たちでコースをつくっています。

日本語コースの構成員ですが、申し上げましたように参加者と呼ばれる学習者がいます。それから日本語交流員、そして、日本語交流員ではないけれども、保育の方のボランティアをしてくださる保育スタッフという方たちがいます。それから日本語学習支援コーディネーター、もちろん教室の運営をいろいろな形で支えてくれる協会の職員もいます。これらの人たちが直接的に教室にかかわっています。時に応じて保育スタッフに、保育を勉強している大学の学生さんが加わることもあります。日本語教育を研究している大学院生などが教室のスタッフとして同じ立場でかかわって、コースをつくるということもあります。大変開かれたコースで、いろいろな人がいろいろなときにかかわってきます。

これからですが、教室の中にはみんなが同じ立場で参加するという多文化共生がある程度起きているような気がするんですが、コースが終わって参加者の方が「さよなら」と言って町の中に帰っていくとき、あるいは子どもたちが学校に戻っていったとき心配になるときがあります。多文化共生は日本語コースの中だけでいいのだろうか、それをどのように地域に生かしていけるのだろうか、それが私たちのまちづくりにつながっていくのではないかと、日本語コースはまちづくりにかかわっているのではないかというふうには感じています。

■ 質疑応答

野山 5人の報告をいただき、これから議論を会場になるべく開きたいと思います。報告は、それぞれ地域ごとに、あるいは団体や機関ごとに行っている活動および知識等々を含めて、共通している部分もありますけれども違うというところもあります。例えば、松山の有償ボランティアという言葉について、初めて聞いたという方もひょっとしたらいらっしやるかもしれません。質問、コメントがおありの方、手を挙げていただければ幸いです。

◆ ボランティアの有償について

質問者その① 横浜市国際交流協会から来ました。皆さんにお聞きしたいのです

が、日本語の指導者もしくはボランティアそれぞれに求める条件にどういったものがあるか、謝礼はどのぐらいか、お聞かせ願いたいと思います。特に、日本語力がゼロでビギナーレベルの外国人の学習者を教えたりするのは、かなり難しいのではないかと思いますので、そういったところも併せて教えていただければと思います。

田中 「えひめ JASL」の場合は、指導するまでに非常に長く訓練期間がありまして、やっとその課題をクリアして初めてプライベートレッスンを行います。プライベートレッスンは先ほども申しましたように有償のボランティアということで、ワンレッスン 45 分 500 円、外国人の方々がコーヒー 1 杯を教師と一緒に分け合う程度のお金ということで、あるいはその 500 円でも大変という人もあります。でも、教師の方も非常に準備にお金がかかりますし交通費もかかります。お金持ちだけがボランティアができるという時代ではないと思いますし、教師もそれだけいただくからには責任を持って教える、そして習う方も JASL のしっかりした訓練を受けた先生に、自分がお金を、貴重なお金を払って勉強すると、そのようなお互いの信頼感を得るために有償ボランティアといたしました。

それと県などからの委託事業では、県の方からコーディネーター料や指導者謝金をちゃんといただいており、JASL の規定で、余分にいただいたお金は JASL に寄付するというので JASL の資金になっております。謝金をいただくようになるまでの訓練が非常に厳しいということだけを申し上げておきたいと思います。

野山 我々が実際に松山にうかがって聞いたことは、訓練の場で公開して授業をするんですけども、そこには歴代の先輩方がズラッと並んで見に来るわけです。意見を言うてくださるわけですが、考えようによっては非常に大変な場です。それに耐えてあるいはそれを通過して初めて現場に立てるといような、厳しい訓練をなさっている団体ということです。

今井 石川県国際交流協会にはボランティアはいません。うちの協会で働いている石川県日本語講師会の先生方には、1 時間 2,000 円から 3,000 円の謝金をお支払いしています。ただし、交通費は出ません。会員の中には隣の富山県や福井県から通っている方もいらっしゃいますし、協会がある場所が駅前の一等地ということもあって、駐車場の料金は 1 時間 400 円かかるのです。2 時間授業をすると 800 円ですので、ボランティアではないんですけども決して謝金が高いとは思えません。

野山 日本語講師になれる資格というか、どういう認定を受けていますか。

今井 資格としては、当協会がやっている日本語教員の養成講座、または一般の教員養成講座を受けていること、それから能力検定試験に合格しているか教授経験があることが望ましいという形になっています。

野山 その辺は足立区はいかがですか？

鈴木 足立区の15の日本語ボランティアグループでは、外国人の会費は、無料のところや、月数百円程度で、ボランティアの会員もだいたい月に数百円程度を会費として支払っているということを聞いていますけれども、すべてグループの運営に任せております。区として後援していることは、先ほどお話ししましたように、会場の確保やボランティア保険料の負担や支援講座、中級講座の開催などがありますが、足立区の考え方としては、あくまで主体は地域のボランティアグループであるということです。

外国では、国によっては何百億円もかけてその国の言葉を教える教室をつくっているところもあり、日本もそういった動きがだんだんできているのかと思いますけれど、日本に来て、ではあなたはここの教室に来なさいということで、果たしてそういう教室がどうだろうかと考えます。地域でボランティアと一緒に、例えばお母さんが学校からもらってくるプリントなどをボランティアグループに持ってきて、これ、どういうことが書いてあるのと、教え合う関係、そういった人間関係づくりの方に重きを置いて考えていきたいと思っています。ですので、日



本語ボランティアになる資格というのは特に制限は設けておりません。外国人と一緒に日本語を新しい気持ちで学んでいく、一緒に考えていくということです。外国人の心のよりどころとして、日本語ボランティアの方々に活動していただきたい、それを応援したいというのが足立区の現段階での考え方です。

野山 宮崎さん、CINGAの場合は？

宮崎 CINGAの場合は、直接に外国の方とかかわる教室を持っているわけではありませんので、特にございませぬ。

河北 武蔵野市の場合は、国際交流協会が実施します「日本語交流員養成講座」10回を受けてから、マンツーマン活動を5回以上経験した後で日本語交流員として登録されます。謝金はありません。ただ、活動1回に関しまして500円の交通費が協会から支払われます。

野山 教室担当だと謝金がありますか。

河北 ありません。

野山 分かりました。ほかにご質問をどうぞ。

◆ 多文化共生に言語学習は必須か

質問者その② 一橋大学フェアレイバーセンター・リサーチフェローと東京外国語大学のセンターフェローのウラノです。皆さんの外国人に対しての日本語教育に注いでいるエネルギーというものは本当に素晴らしいものだと思います。多くの人々がそれに助けられることは確かですけど、私は少し別の視点から質問したいと思います。といいますのは、このイベントもそうですけど、「多文化」「多言語」という、そういった名前前で議論あるいはイベントが開催されるときに、どうしても「多文化」「多言語」なのに日本語にディスカッションが集中するということが少し気になります。その根底には多文化共生というはやり言葉があると思うんですけど、私からすれば多文化共生というのはある面では「ちょっと恥ずかしがった同化主義」かなという印象を持っています。ですので、私が皆さんの意見として求めたいことは、例えばブラジル人コミュニティでいうと、日本語が話せなくても生活していける実態があります。ほかの地域でも他の国の人がそういった生活ができるかもしれない。多くの場合は、そういった実態を警戒するようなムードがとても強い社会ではないかという印象を持っています。

ただ、マイノリティーの当然の権利ということを考えますと、自分が生活し、心地のいい言語で生活し続けたいということは当然のことだと思うのです。そしてそれは権利でもあると思います。それが必ずしもマイナスではないと思います。

そこで自分の文化を大事にして、母国の文化を大事にして、何か新しいものが生まれてくるかもしれない。その点について少し皆さんのご意見をおうかがいしたいと思います。

野山 河北さんからどうぞ。

河北 私個人の意見ですけれども、本当にそういうことができれば、実現していけば素晴らしいと思います。私が今、一番懸念しているのは、コミュニティーをつくることはいいと思うんですが、えてしてコミュニティーができるとほかのマジョリティーのコミュニティーから孤立してしまいがちです。そこだけが何か情報すら入らない隔絶された社会になってしまう、そういうことがとても私には心配です。その小さい閉ざされたコミュニティーにいる人たちは、いろいろなことが外で起きているのにその情報すら知らないで暮らしている、とても少ない仲間の中で何とか助け合おうとして生きている、それはあまりに寂しいと思うのです。ですから、コミュニティーができることは構いませんけれども、やはりつながりのある行き来の自由な開かれたコミュニティーができていくといいと個人的には思っております。

宮崎 河北さんの話に続けますと、開かれたコミュニティーにするためにはやはりそこに共通言語というものが存在しないと成り立っていかないのではないかと、いうことをすごく感じます。もちろんそれは日本語でなくてもいいかもしれませんが、何らかの言語が必要で、そしてその言語を話さない人、話せない人はやはりそこから遠ざかってしまうことになるのではないかと、いうこともひとつの問題かと思えます。今、おっしゃったようなこと、コミュニティーでなくても日本という国全体で日本語が分からなくてもその人の言語にこちらから近づいていくというようなことが起こってくれば、それはまたそれで素晴らしいことだと思いますが、そのためには日本人全体の意識革命が必要だと思うのです。マジョリティーの人たちがそんなことは何も思っていないで、わずかな人たちがそれを思っていたら、日本の社会は変わらない。全体の意識革命をするための覚悟が私たちにあるかどうか、そこに大きな問題があると思えます。

鈴木 外国の方が日本で暮らす上で、いろいろな壁があると思いますが、心の壁ですとか制度の壁も大きいです。その中で言葉の壁というのは大変大きいものであると考えます。一番分かりやすいのは、例えば防災の問題です。何か起こったときにどうしよう、言葉が分からない、逃げられない。そういう状況をなくすためにも、最低限必要な日本語は日本社会で生きていくために必要なものだと思います。日本人と外国人の方の間には、どうしても心の壁もあります。違いばか

りに目がいてしまいますけれども、同じ人間なんだということ、喜怒哀楽を感じる部分は同じなんだということ認識し、分かり合うことが大切だと思いますので、やはり交流をするということが大切であると考えます。マイノリティーが孤立してしまわない社会をつくっていくのが必要ではないかと思います。

今井 石川県では、そういうふうな外国人のみのコミュニティの活動についての議論を聞くことはまだあまりありません。例えば、地域での日本語教員養成講座で日本語の教え方に内容が偏ってしまったり、県や市民団体の会議の中でもまず日本語を教えることありきになってしまったりという状況が見られます。一方で在住外国人が相互扶助の団体を立ち上げたんですけれども、そこに日本人がなかなかかわっていけないという状況も見られますので、そのように日本人側の働きかけと外国人側の試みがうまくかみ合っていないことに今、非常に危機感を持っているところです。

田中 私どもは、先ほども申しましたように外国人からの要望がありまして、日本語を勉強したいという外国人が非常に多いということで、それならば私どもができることは、ということで勉強しながら日本語を教えるんですけれども、それは日本語を押し付けるわけではなくて、みんなと交流するそのひとつの手段として行っていることで、外国語を拒否するわけではありません。それから外国の文化を拒否するわけではなくて、日本語を通してお互いに共生して、そして友達になったときに初めて向こうのマイノリティーの言葉をみんなに紹介してもらったり、そういうチャンスも出ますので、日本語は最初の取っ掛かりということで、相手の方の、マイノリティーの方々の文化を否定するというのでは全くありません。それに愛媛県国際交流センターとか松山市国際交流センターはいろいろな意味での生活支援をやっておりますので、そういうところにお任せして、私どもは日本語で支援しようということでやっております。

野山 ウラノさん、補足をどうぞ。

質問者その② 改めて話をしたいと思いますけど、もちろん日本語を習得するというのは本当に一番大事なツールだと思います。日本で生活していく上で。それはもう全く否定する必要はないし、だから皆さんがやっていることはとても大事なことだと私は考えています。ただ、私はブラジルで育ったということもあると思うんですけれども、08年はブラジルへの移民の100周年ですが、例えば50～60年間ブラジルで生活して、片言のポルトガル語しか話せない人は結構いるのです。だからといって、その人が不幸になっているかといったらそうではないのです。例えばリベルダーヂ地区、すなわち東洋人街で、日本語でしゃべりながら

公園のベンチに座って優雅にお話をしている、そういう光景がたくさんあるわけです。せっかく多文化、多言語といった社会づくりに関して、これから日本で力を入れていくというそういった状況がありますので、概念的に一方的に日本語、日本語というのではなくて、むしろ異質なものをそのまま受け止める、そういう心に育てるということが大事ではないかと思います。だから、ある意味では私のコメントというのは皆様にとって失礼かもしれないんですけど、全然私はそういう気持ちで言っているわけではないのです。

野山 関連して一番後ろの方、どうぞ。

発言者その① 本センターフェローの小嶋といいます。今、ウラノさんからのお話で、マイノリティーの言語だけでも生活している場所があるということ、それを尊重すべきだというお話がありました。それはあくまでもニューカマーの人たちがカルチャーショックを和らげる、いわば緩衝装置としての機能があって、それは重要な機能があると思うんですけど、それは過渡的なことであると思います。ウラノさんがおっしゃったブラジルの東洋人街、日本人街では1世のポルトガル語がよく話せないような人たちがそこで日本語を話していても何も言われぬ、非難を受けないということですが、それはブラジルにおける日本人移民の



歴史がもう100年もたっているからであって、ブラジルに日本人が移住をして、ちょうど現在の在日のブラジル人と同じように10年、20年という段階では、日本人移住者たちは非常に閉鎖的でポルトガル語を話さず、非難されていました。排日運動まで起こっているわけです。今日、ブラジルにおいて日系人が高い評価を受けているというのは、2世以降の人たちがブラジル社会に貢献し、日本文化とブラジル社会、両方の文化を理解して仲介者として活躍している、そういう人たちが育ったからこそであって、1世の時代にはそのような評価は出ていなかった、と思います。ですから、マイノリティーの言葉を尊重することは非常に大事ですけれども、やはりホストカントリーである日本の言葉を第一に理解する、それが基本だと思います。その点においてはウラノさんも認めていらっしゃるのですがそれはいいと思うんですけれども、やはり1世の人たちというのは文化の違いを乗り越えるというのは非常に難しい。それを乗り越えていくのは2世以降の世代であると思います。ですから、その教育の場が重要であり、その教育の場を通してブラジル人家庭と地域のコミュニティーが連携を進めていくということが重要になると思います。

野山 このまま続けると時間がなくなってしまうので、恐縮ですが、いったん話を戻させてもらいます。この議論に非常に重要なポイントがおそらく2つあると思います。ひとつは、プログラム構築の諸要素で、地域特性ということを掲げています。人口規模と外国人比率、あるいは国籍や居住者の構成等々というのは、ウラノさんがおっしゃったことを考えるには非常に重要なポイントで、群馬県の大泉町とか太田市とか、私が見る限りでも大泉町は今でもそういう生活ができなくはないかもしれないぐらいの人がいらっしゃいます。でも、それでも2世以降、つまり今、住んでいる日系の方の子どもさんたちのことを考えると、日本語はとても大切だという意識は芽生え始めていて、進学問題がとても重要になり、例えば日伯学園のようなブラジル人学校があったりします。それを考えたときに今、小嶋さんがおっしゃってくださったようなことというのは、たぶん通過儀礼では必要なことで、50年、100年、あるいは何十年後か何年後かということになれば、母語の問題、あるいはポルトガル語の話者がポルトガル語を使って暮らせるという状況も、バイリンガリズムの中で考えられるということはあると思うのです。でも、それをいきなり理念だけで主張してできるものではないということが地域の場合は強くあります。そういう意識が非常に強くある秋田県の能代市で長い間日本語を教えていらっしゃる、そして、プレフォーラムでお世話になった「のしろ日本語学習会」を主宰されている北川裕子さんが、会場にお見えな

ので、ウラノさんのご意見、小嶋さんのご意見も含めて、ご自身の体験からどう思われたか少しうかがっておきたいと思います。

北川裕子 日本語教室をやって分かったことがありました。日本語は必要で勉強しなきゃいけないんです。時間とコストと、それは同じように子どもの場合も時間がないですよ。大人になるためには今、勉強しなきゃいけない。日本の学校は、出来ても出来なくても上がっていくのです、卒業させなきゃいけない。でも、それを早く教えるために子どもたちには日本語というのは必要です。私はこの仕事を20年近く続けています。その間、子どものことも見てきました。父親が日本人、母親が外国人、そういう子どもたちがたくさんいます。その子どもたちは自分の国をいったいどっちだと思えばいいんでしょう。そういうことを考えたときに、日本語指導だけではいけないと私は思いました。

今やっているのは、幼稚園や保育所への働きかけです。子どもは日本語が分かりますが、親は話せません、読めません。全部平仮名に直してくれと幼稚園と保育所に要望書を出しました。さらにやり始めているのは小中高の各学校です。なぜかという、この何割か、田舎のような少ない人数の中で子どもが大人になったなら、その一握りの大人が私たちの面倒を見る大人になるのです。その人たちの居場所がどこなのかという町にはしたくなかった。ですから、日本語教室というのは別の視点から見ると、それが発信できる場所であるということを私はやってきて分かりました。日本語を教えることはもちろん私はやっています。でも、それと同時に私のように教える立場だからこそ見えることはたくさんあって、教える立場だからこそ現場の人間とまっとうに渡り合えるものをたくさん持っている自分に気がついたのです。ですから、今、能代では「外国人」と指さす人はいません。なぜなら、教室で学んでいる人だから、あの人だったら安心して一緒に手を取り合える人だよと言えるように変わってきました。

野山 ありがとうございます。ウラノさんの問題提起に始まって少し開いて議論をしていただいたわけですが、地域日本語教育のプログラムを考えるとときに、多言語という問題を考えれば、多文化主義とどうしても突き当たります。それをどのように開いていくのかということが、理念として必要です。ところが、その議論というのはなかなかされないまま地域の日本語教育は動いているところがあることは確かです。それをちゃんと視野に入れながら動いていかないと、どこかでつまずいてしまう可能性があるということだと思いました。

北川さんのプレフォーラムの報告の中に、教室の生徒さんたちとバス旅行したときの話がありました。バス旅行で北川さんは、日本は時間通りに動くというこ

と、時間が大切だということを経験を通して教えたいということをやっているということでした。これに関連して参加者の方から私に質問がありました。「あれは日本の文化の押し付けではないか、国際理解の観点から見れば非常に押し付け的な行為に思える」というのです。それは実は押し付けというよりも、これをやらないと学習者本人がある意味で損をするということと、人が人として生きる、能代で生きていくときにどうやっていくかというときに学ぶ必要があるものがあるのかある、それを学んで初めて次の世代がうまく生きていけるということをつからせるには、やはり5年や10年必要だという長期的視野の中でやっているひとつの行為だという説明をしました。

◆「思い」をどう教室運営に反映させるか

一応、納得はしていただきましたが、どうしても地域の日本語教育の場での年間を通した総合的な活動の行事と内容だけを見る限りでは、そこまで具体的にはよく見えてきません。表層的に見ると、プログラムの内容がなんとなく同化的に見えてくるというひとつの例だと思います。そうならないようにするためにも、我々の班ではいろいろな町、いろいろな形態の日本語教室を拾い上げていきたいと思っています。今日、おいでいただいた松山、それから金沢という町は、50万人前後の規模だと思うんですけども、そういう町だと人間の目で見渡せない大きさです。能代の場合は6万人規模ぐらいです。そうすると北川さん1人の目でだいたい見渡せます。規模によって教室の運営方法や協力体制をどうつくり上げてきたかということに違いが見えてきます。町の規模がどうであれ、ウラノさんがおっしゃったことがどう実現できるかということとはとても大切な命題で、小嶋さんの意見も含めて、どんなふうに現場で解決していくのかということだろうと思います。そこら辺を含めて、最後に一言ずつ皆さんにコメントをいただきたい。要は、教室を運営していく中で何を今後大切にしていきたいかということです。

田中 私どもが指導してましたブラジルの研修員の方が、現在までのブラジル移民の経過というのをこの間話してくれまして、初めて私たちも日系ブラジル人の歴史を知りました。私たちも知ることができたということは、彼女がそれだけ日本語を学んでくれたからです。彼女が言うところによりますと、今のブラジル2世、3世は非常に受け入れられてとてもいい。というのは、自分たちのブラジル人としての誇りと、それから日本人としての誇りの両方を先輩とともにずっと持ち続けているからだ。2つの文化を私たちが受け持っている、そういうような

意識でした。私どもも日本語を教えることによって学びたいし、それからマイノリティーの人たちは日本語を学ぶことによって、決して自分の国の言葉を忘れるのではなく、ご自分たちでご自分たちのマイノリティーの文化とか言葉をずっと保存していただいて、両方がお互いに学び合うというような姿勢になっていきたいと私は思います。

今井 石川県では、能登半島の北部、奥能登にはまったく日本語教室がない状況です。では外国人がいないかという決してそんなことはないので、今後は奥能登の方へ日本語の教室、あるいはボランティアの養成をしていくということが急務です。ただし、先ほど石川県の日本語教育の歴史をざっと紹介しましたが、金沢が中心になって進んできた経緯がありますが、それを少し変えていかなければいけないのかと思っています。金沢での当協会などの試みをモデルにしつつ他地域の方へ進出していくわけですが、一方で、金沢もまた変わっていかねばいけないというのが今の課題です。

鈴木 地域に住んでいる外国人の方に日本の生活になじんでいただいて、日本を好きになっていただければと思います。それと同時に日本人も外国の文化を理解していくことが大切だと思います。理想論になってしまっていますが、日本語ボランティアグループの皆さんだけでなく、足立区の全区民が総日本語ボランティアと



なり、外国の方とかかわり、同じ気持ちを共有していくというのが一番目指していききたいところです。

宮崎 先ほどからお話をうかがってまして、多文化共生社会というのはやはり「これ」というものを誰もまだ見たことがないのではないかと思います。きっとそれぞれが何らかのイメージを持っていて、それに向かって話すということが今、盛んに行われていると思うのですが、私個人としてはやはり CINGA の目的というものを求めていきたいと思います。それは個々人がそれぞれ誇りを持って生きられる社会ではないかと思います。何ができるか分かりませんが、そのような方向に向かっていろいろな活動を進めていければと思っています。

河北 先ほどの武蔵野市国際交流協会についての発表の中でも申しましたけれども、教室の中にはある意味個々人が誇りを持っていて、そういう雰囲気できたかなという感じがします。いらっしゃる方もリピーターがとても多いのです。休んでいてもしばらくぶりにまた来られます。その中の1人がおっしゃった言葉がうれしいのですが気にかかっています。「私はここが本当に好きなんですよ、もう大好き、ここの人たち。ここに来るのはうれしいです」と言ってくれたのですが、それってここしかホッとしないんですね。そこしか居場所がない。よく居場所づくりと言いますが、居場所ってそんな狭いものでしょうか。やはり日本全体、私たちが暮らし全体の中でみんながいろいろところでホッとできて、自分が出せて、自分に誇りが持ててというまちづくりにかかわっていくのがやはり地域の日本語ではないかと思っています。何ができるのか、何をしようかというのは大きな言葉では言えません。目の前に出てきたことにみんなで取り組むことだと思っています。起きた問題に目をつむらない、目をそむけないということだと思っています。

野山 今日はプログラムの内容を話していただいて、それに皆さんから反応していただきました。そして、違う言語背景を持った方の意見から始まって議論がこの場でできたことを非常に感謝します。プログラムそのものを具体的にもっと深めていく話し合いまでいかなかったことは恐縮ですが、本センターで今後を見つめるときにとっても重要な議論ができたと思っています。最後に、私がずっと追いつけているスウェーデンという国の状況をご報告して終わりたいと思います。

スウェーデンでは、今でも子どもたちに母語も含めてスウ



野山 広

エーデン語、第二言語の習得、両方をひっくるめてやっているわけです。世界中で珍しい、それをちゃんと予算化している国です。どうしてそれが動き始めたかという、最も外国人比率の高かったフィンランド人がロビー活動をやり、継続をしてある種の外圧をスウェーデン政府に与えた成果です。これはいずれウラノさんが大切な役割を担うんでしょうけれども、日系の人が非常に多いこの状況の中で、本当にブラジル人がポルトガル語も含めて日本語を習得していきたい、バイリンガリズムの言語環境をしっかりとつくっていききたいというふうに思ったときに、やはりスウェーデンにおけるフィンランド人が起こしたロビー運動のようなことを、また日本に戻ってきた日系の人々が中心になってやっていかないとなかなかものは動かないというところもきっとあるんだろうと思います。スウェーデンではその後30年以上も母語の支援活動を行っています。継承ということについて言えば、それは母語の習得にはつながらないかもしれませんが。でも、例えば、子どもの誇り、ポルトガル語の文化、ブラジルの文化に対しての誇りを失わないためには必要なことで、スウェーデンでは就学前からフィンランドの母語の教育が行われていることがとてもプラスになっているという話を何度も聞いています。

それを考えれば、日本でも母語の支援が必要だということを、能代の北川さんが先ほど気がついたとおっしゃいました。その気づきに至るまで20年近くかかったわけです。そうだとすると、北川さんのような気づきの機会や場を持っていない大多数の住民の方に、こうした母語の問題の重要性に気づいていただくことはなかなか大変ですし、時間もかかると思います。そういう気づきの場を創出できる人材の問題を考えているのが、隣の教室で今日開いているコーディネーターの専門性を考える分科会です。全部ひっくるめて実はここと表裏一体の関係があるような分科会で、本当は並行してやるのではなくて全部聞いていただいてもいいかなと考えていただければよかったです……。別々でやっていることも含めてお許しいただき、深まった議論のプログラムにはなりませんでしたが、短い時間の中で違った形で、この分科会で掲げている地域特性のこと、それから将来の地域のリソースとして活躍できる人材にかかわる母語の問題、バイリンガリズムの問題、それから教室機能としては居場所だけにとどまらない教室のある種の機能が必要だという話もあったと思います。維持発展の要因の中に間違いなくここに並んだ人たちのビリーフ、信念というものが反映されて教室を維持していくことは分かっていただけではないかと思います。ご協力ありがとうございました。